令和５年８月７日発行　通巻 224 号
AUG. 2023 Vol.29

神奈川県立歴史博物館だより No.2

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History

特別展
「足柄の仏像」のみどころ …… 2
資料紹介
「川俣絹布整練株式会社カレンダー」
明治 43 年版…… 6
THE けんぱく PUNCH
学校と博物館の連携…… 8

萬巻上人坐像（国指定重要文化財）　箱根町・箱根神社

特別展「足柄の仏像」のみどころ

はじめに

特別展「足柄の仏像」は、2020年に開催した特別展「相模川流域のみほとけ」に続く神奈川県の彫刻を地域別に紹介する特別展の第2弾となります。

「相模川流域のみほとけ」は、相模川両岸の相模原市・平塚市・藤沢市・茅ヶ崎市・厚木市・海老名市・座間市・寒川町・愛川町の7市2町を取り上げました。相模国の8郡のうち高座郡、愛甲郡の大部分と大住郡の一部となります。今回は相模国の西側足上郡と足下郡の2郡を取り上げます。小田原市・南足柄市・中井町・大井町・松田町・山北町・開成町・箱根町・真鶴町・湯河原町の2市8町です。これらの地域は県西や西湘とも呼ばれ、北は丹沢山、東は大磯丘陵、西は箱根山と山に囲まれた足柄平野を有します。

東国の彫刻史研究の基礎となる久野健編『関東彫刻の研究』では、神奈川県の仏像は127件（個人蔵11件含）紹介されていますが、そのうち当該地域の仏像は13件です。県全体でみれば1割にもみたない件数です。彫刻の国指定重要文化財は5件あり、箱根町・箱根神社の萬巻（まんがん）上人坐像、同男神・女神坐像、同元箱根磨崖仏、小田原・蓮台寺の他阿真教（たあしんぎょう）坐像、同宝金剛寺の銅造大日如来坐像となります。本展では箱根神社の2件と蓮台寺の他阿真教像の出陳がかないました。

当館で県西地域の仏像をテーマとした特別展は初めてとなります。しかし、本展以前にこの地域の仏像を取り上げた展覧会が開催されています。1980年に小田原市郷土文化館分館・松永記念館でおこなわれた、その名も「西湘の仏像」です。図録をみると23軀（うち個人蔵5軀）の仏像が出陳されたようです。借用先の内訳は小田原市の寺院が9か寺、秦野市が3か寺、南足柄市が3か寺、箱根町2か寺、松田町1か寺、となります。小田原市で実施されたことから同市からの出陳が多いのは当然ですが、それ以外の市町からも仏像を拝借しており、西湘の文化の伝統を回顧するにふさわしい展覧会であったと推測されます。

「西湘の仏像」が実施された後、県西地域の市町では彫刻の悉皆（しっかい）調査が進み、調査の報告や市史・町史にまとまった論考が相次いで発表されました。それらの彫刻の悉皆調査には当館の歴代の彫刻担当学芸員も携わり、基礎となる調書や画像データが当館に集積されています。また、1988年開催の「神奈川の金銅仏」や2016年開催の「神々と出逢う―神奈川の神道美術―」の特別展で紹介された彫刻作品も少なくありません。今回の特別展はこれまで当館が実施してきた調査・研究・展示の成果を多く含んでおり、県立博物館時代からの約55年間の活動があったからこそ開催できた展覧会と言えるでしょう。

「西湘の仏像」と今回の「足柄の仏像」の出陳作品を比較すると、両方に出陳されているのは、箱根町・興福院の菩薩頭部、南足柄市・保福寺の十一面観音立像、同朝日観音堂の毘沙門天立像の3軀だけです。この3軀は当時すでに神奈川県指定文化財に指定されている県内では知られていた仏像です。今回の「足柄の仏像」では、「西湘の仏像」以後に確認された仏像が多く出陳されます。

相模国最古の仏像の痕跡

まずは、相模国足下郡（現、小田原市千代）に存在した古代寺院の千代廃寺跡をみていきましょう。千代廃寺は、7世紀後半に建立され数度の改修期を経て10世紀頃には廃絶しました。横須賀市・宗元寺とともに相模国で最も古い寺院として知られています。千代廃寺は江戸時代には瓦を多数拾うことができる場所として地誌『新編相模国風土記稿』にみえます。近年、千代廃寺で採集された軒丸瓦（明治大学博物館所蔵）に残るひっかき傷のような文字が「大伴五十戸」と解読され、注目されました。大伴は、千代廃寺の近くにある大伴郷にあたります。「五十戸」は令制下における「里（郷）」にあたり、7世紀後半段階で使用された表記であることから、この瓦もその時期に製作されたものと思われます。ただ、当時の都は藤原京で詔が出されたからといってすぐに東国の隅々まで浸透したかは疑問の余地ありとされ、もうすこし下る時代とも考えられています。さらに千代廃寺からは、塑像の断片が十数点発掘されており、千代廃寺には塑像が数軀安置されていたことがわかります。その内螺髪（らほつ）が14点あり、螺髪の大きさから半丈六（坐った状態で約1.2m）以上の大きさの如来像が安置されたと推測できます。製作年代は7世紀末にさかのぼる可能性が指摘されており、相模国では最古の仏像の断片ということができるでしょう。いまのところ相模国域では、伝世した古

代の塑像は確認されておらず、唯一の塑像としてもっと評価がなされてもよいでしょう。また塑像断片の花形の飾りは、東大寺の戒壇堂四天王像や法隆寺食堂の梵天帝釈天像にもみられる塑造の仏像では比較的よくみられる形をしています。如来像を中尊としてその左右に菩薩像、その三尊の周囲には四天王像や梵天帝釈天等が安置され堂内を荘厳していたかもしれません。塑像の断片にはほんのわずかですが金箔が残っているものがあります。そのためこれらの仏像の表面には金箔が施され、まばゆいばかりの仏像群だったことが想像できます。千代廃寺に関する文献資料は残っておらず、具体的な寺院の名前もわかりません。ただ、『上野国交替実録帳』には、10 世紀の上野国における国分寺やそれに準じる定額寺に安置されていた仏像の記述があり、東国の寺院として参考にすることができます。おそらく、定額寺と同規模の仏殿に仏像が安置されていたとみられます。

平安時代の仏像が集中する足柄

県西の仏像で注目してほしいのは、平安時代の仏像の多さです。南足柄市には特に集中して平安時代の仏像が残されています。保福寺の薬師如来坐像と十一面観音立像、朝日観音堂の聖観音立像や毘沙門天立像等の木彫群、中沼薬師堂の薬師如来坐像【図 1】、日影公民館の阿弥陀如来立像です。この地域の仏教美術に関わる文献史料はほとんどありません。これらの仏像は平安時代の足柄の様子を推測するための重要な資料なのです。

神奈川県というと鎌倉時代が注目されがちで、平安時代のイメージは薄いかもしれません。ただ、鎌倉幕府の編纂した『吾妻鏡』をみると、源頼朝は相模国、武蔵国、伊豆国の関東一円の寺社を崇敬しており、特に相模国の寺社に対して北条政子の安産祈願の実施や後白河法皇の崩御にともなう法会への僧の参加、各寺社の縁起の集成や伽藍の修復をおこなっていました。

神奈川の平安仏といえば箱根神社の萬巻上人坐像【表紙】を忘れるわけにはいきません。「神々と出逢う」以来、17 年ぶりに当館での展示となります。平安時代初頭の 9 世紀に造られた関東では最も古い肖像彫刻です。萬巻上人は、奈良時代後半から平安時代初頭にかけて畿内や東国で活躍が知られます。おもに神仏習合にかかわる神宮寺建立が知られ、多度神宮寺や鹿島神宮寺を建立しました。鎌倉時代の『箥根(はこね)権現縁起幷序(ならびにじょ)』では箱根権現を建立したと記されます。萬巻上人坐像は、カヤの一木造りで内刳(ぐ)りを施さないためかなりの重量があります。表情は眉根を寄せ口を一文字に結びやや厳しい面貌表現です。耳たぶが長く、如来や菩薩のように頸に三道を刻むところは、単なる肖像彫刻ではなく、神像として造られた可能性が指摘されています。着ている衣にも特徴がみられ、法衣を胸前で左前に襟を合わせています。このような着衣形式は京都・西往寺の宝誌(ほうし)和尚立像と共通しています。宝誌和尚像は 11 世紀の製作と考えられていますので、萬巻像とは製作年代に開きがありますが、宝誌は神異僧として中国、朝鮮半島、日本で知られており、神異僧をあらわすような着衣形式のひとつだったのではないかと想像されます。

さらに今回は「神々と出逢う」をきっかけにその存在が確認された男神・女神坐像【図 2・3】が重要文化財の指定以来、はじめて箱根以外の博物館で公開されます。数年前までは神職ですらその姿をみる機会はほとんどなく、本殿の扉の向こうに人目に触れず安置されていました。そのため表面の彩色がおもいのほかよく残っており、女神像の両脚部がなくなっているものの奇跡的に保存状態は良好です。

【図 1】薬師如来坐像（南足柄市指定文化財）南足柄市・中沼薬師堂

【図 3】女神坐像（国指定重要文化財）箱根町・箱根神社

【図 2】男神坐像（国指定重要文化財）箱根町・箱根神社

小田原市の京福寺には平安時代の釈迦如来及び両脇侍坐像が伝わります。この三尊は中尊だけでなく左右の脇侍も坐像という関東では大変珍しい尊像構成です。神奈川県内の平安時代の仏像では唯一の例で、等身大に近い坐像なので迫力があります。

美麗の阿弥陀如来像

鎌倉時代の仏像の中では小田原・本誓寺阿弥陀如来立像 2 軀は必見です。1 軀は本誓寺の本尊【図 4】で、口をわずかに開き歯をみせるいわゆる歯吹（はふき）阿弥陀として有名です。近年、修理が施され表面の汚れをとったところ、衣に金を極細に切って文様をあらわす截金（きりかね）がよくわかる姿となり面目を一新しました。修理後初公開となるので、修理以前の姿を知っている方にとっては驚きをもって迎えられることと思います。本尊像の特徴は他にもあり、足裏に足枘（ほぞ）を造らず代わりにかかとの後方に棒を 2 本通して台座に固定しています。足裏には仏の特徴である仏足文（ぶっそくもん）が描かれています。本体は木造なのですが、両手だけ銅で造られています。もう一軀は脇仏として安置される阿弥陀如来立像です。本尊像よりわずかに大きいですが、ほぼ同じ時代の製作とみられます。脇仏像も足裏に仏足文をあらわします。この像だけの特徴としては髪の毛の螺髪が一粒ずつ木芯に銅線を巻き付けて造られている点です。脇仏像は修理が実施されていないので、表面が黒くみえますが、よくみると本尊像と同じように截金が施されているのがわかります。もしかすると、表面の汚れをとりのぞけば、本尊像のようになるのかもしれません。

【図 4】阿弥陀如来立像（神奈川県指定文化財）小田原市・本誓寺

この2軀のような阿弥陀如来像が全国に残っています。仁治3（1242）年に造られたことがわかる福岡・万行寺の阿弥陀如来像をはじめ、県内では平塚・善福寺の例が知られます。顔もやや面長で頬がふっくらとしており、モデルとなった仏像があったのではないかと推測されています。まだ、はっきりとどの仏像を模刻したということはわかっていませんが、根本像も本2軀に負けず劣らずの美麗な仏像であったことは容易に想像できるでしょう。

足柄、箱根をみまもる地蔵菩薩像

足柄坂や箱根周辺には地蔵菩薩像が比較的多く伝来します。代表的な作例は、正安元（1300）年の元箱根磨崖仏の六道地蔵とよばれる像高3メートルを超える地蔵菩薩坐像でしょう。この地蔵を造るにあたっては、鎌倉・極楽寺、奈良・西大寺で活躍した良観上人忍性がかかわったとされます。周辺の二十五菩薩と呼ばれる地蔵菩薩の群像を含めて、地蔵講という地蔵菩薩を信仰するグループが造像にかかわっていたようです。地蔵菩薩は西側を向いているので、京方面から鎌倉へ向かう人々を意識して造られたのでしょう。元箱根磨崖仏は岩に直接彫られているため実物を博物館に運ぶことはできません。もしまだみたことがないようでしたら、一度訪れることをおすすめします。このような大きな磨崖仏が神奈川にあることに驚くことでしょう。足柄坂付近では、弘済寺地蔵菩薩坐像【図5】があります。足柄坂をくだり関本にはいる少し手前の街道沿いに建つ弘済寺。この地蔵像は2020年から修復が施され、2023年に本体・台座・光背の修理が終わりました。修理後博物館では初公開となります。鎌倉時代後期から南北朝時代に造られ、江戸時代に2回修理が行われています。

【図5】地蔵菩薩坐像（南足柄市指定文化財）南足柄市・弘済寺

仏像は造られた当初の姿で残ることはほとんどありません。壊れたり傷んだりした際には、その都度修理をされて数百年伝えられてきたものが大多数です。仏像を直す、と口では簡単にいえますが、仏像を拝む人、信仰する人、守る人がいなければ修理を実施することはできません。近年の少子高齢化によって、これまで守られていた仏像を守れなくなり、雨ざらしのお堂に放置せざるをえない例や地方公共団体に寄贈・寄託する例が全国で急増しています。神奈川県も例外ではありません。本展のほとんどの仏像が、なんらかの修理を経て、現在まで地域の人々によって大切に守られているのです。

おわりに

「相模川流域のみほとけ」をご覧になった方は、本展を合わせてみていただくことで、県央や県西地域にたくさんの仏像が現在も残されていることを実感していただけると思います。「相模川流域のみほとけ」はコロナ禍での開催となり、館には行けなかったという方も多かったと思います。本展の予習に当館ライブラリーに配架している「相模川流域のみほとけ」図録の一読をおすすめします。

（学芸員・神野（じんの） 祐太（ゆうた））

特別展

足柄の仏像

開催概要

会期：2023年10月7日（土）～11月26日（日）
休館日：毎週月曜日〔10月9日（月・祝）は開館〕

資料紹介　小林清親「川俣絹布整練株式会社カレンダー」明治 43 年版

「川俣絹布整練株式会社カレンダー」

当館では約 6200 点からなる浮世絵のコレクション「丹波コレクション」を所蔵しており、継続的に作品の調査研究および作品情報の更新を行っています。今回は再整理を行った作品の内、横浜の絹織物の輸出産業に関連する資料「川俣絹布整練株式会社カレンダー」をご紹介します。

「川俣絹布整練株式会社カレンダー」は、横浜港より絹織物の一種である羽二重の輸出を行っていた川俣絹布整練株式会社が、外国の顧客向けに商品附録として制作していた木版多色摺の 12 カ月カレンダーです。制作期間は明治 42 ～ 45（1909 ～ 1912）年と言われており[1]、その内当館が所蔵しているのは小林清親の絵を使用した明治 43（1910）年のカレンダーです。“DEER AND STAG”の文字に牡鹿と牝鹿が向かい合うデザインの商標と各月のカレンダー、そして画面下部には、左から英訳された商品、自社の整練技術の上質さを宣伝する文章、社名が青一色で印刷されています。

「川俣絹布整練株式会社カレンダー」に使用される図版は、過去に出版されている錦絵を再利用して制作しています。例えば、明治 42（1909）年のカレンダーは、4 月、5 月、6 月、9 月、10 月、12 月に水野年方画の「今様美人」〔明治 31（1898）年〕、1 月、2 月、3 月、7 月、8 月、11 月に池田輝方画の「江戸の錦」〔明治 36（1903）年〕という二つの錦絵シリーズから抜粋した図をそのまま使用しています。その他にも、楊洲周延画「真美人」〔明治 30 ～ 31（1897 ～ 98）年〕や右田年英画「美人十二姿」〔明治 34（1901）年〕など、明治 20 年代末から 30 年代中頃に出版された錦絵のシリーズを中心に制作が行われていたことが先行研究にて指摘されています[2]。

上記で示した元の図である錦絵のシリーズは、全て版元・滑稽堂秋山武右衛門が版木を所有しているという点が共通しています。当館所蔵のカレンダーも、滑稽堂が出版した版が確認されている小林清親の手掛けた美人画シリーズ「花模様」の図をもとに制作しています。

カレンダーと「花模様」

「花模様」は、江戸時代の慶長から天保時代（1596 ～ 1844）を表す装いの美人を描いた大判 3 枚続きのシリーズです。画面中央の胸から上をアップで描く大首絵の形式で描かれた女性に、各時代の風俗を反映した背景と、その時代の有名な和歌や俳句を画面左右に配した構図が特徴的です。制作年は版元によって異なり、武川清吉版は明治 29（1896）年、滑稽堂版は未記載のため不明です。シリーズ全 10 図のうち、当館には「天保ノ頃」を除いた 9 図が収蔵されており、その内カレンダーの原画には「寛永正保」「承応万治」「享保」「安永」「天明」「文化」「天保」の 7 図が使用されています。

清親画の明治 43 年カレンダーと「花模様」を比較する際に最も注目すべきは、画面中央の美人だけでなく、背景として描かれている人々もカレンダーの図に採用されている点です。例えば、「川俣絹布整練株式会社カレンダー　六月」【図 1 】「十月」【図 2】「十一月」【図 3】の 3 点は、風呂上がりに部屋でくつろぎながら手紙を読む女性を描いた「花模様 寛永正保頃」【図 4】をもとの図としています。その内、【図 1】は背景の中央に描かれた垂髪の男女子供の三人組、【図 3】は画面右側に描かれた二人組の人物たちを切り取り描いています。

また、【図 3】に描かれた二人組の内左側の人物の着物の柄を見ると「花模様」では馬柄であったのに対し、カレンダーでは鹿柄へ変更されています。以上の指摘以外にも各図大小さまざまな変更、改良が確認できることから、明治 43 年のカレンダーは、一から新しく制作した図ではないものの、手間をかけて作られた作品であることが分かります[3]。

川俣絹布整練株式会社と明治末期の錦絵

川俣絹布整練株式会社は、明治 33（1900）年より横浜市真砂町一丁目七番地に本店を構え、福島県岩代国川俣町の工場で生産した羽二重を販売し、商標の“鹿印”をトレードマークに品質における信用を勝ち取っていきました。その業績については、総合的な日本近代史書である『開国五十年史　附録』[4]や、各界の功労者の略伝が載る『横浜成功名誉鑑』[5]など、当時刊行の書籍や、雑誌、新聞の記事から検討することができます。

また明治末期は、西洋より日本に輸入されてきた印刷技術の定着によって、浮世絵をはじめとする木版印刷の需要の縮小がより進行する時代でした。

左から

【図 1】「川俣絹布整練株式会社カレンダー 六月」小林清親、明治 43（1910）年

【図 2】「川俣絹布整練株式会社カレンダー 十月」小林清親、明治 43（1910）年

【図 3】「川俣絹布整練株式会社カレンダー 十一月」小林清親、明治 43（1910）年

【図 4】「花模様　寛永正保頃」 小林清親、版元・制作年不明

以上の点から「川俣絹布整練株式会社カレンダー」は、横浜の輸出産業の歴史と、明治末期の木版印刷の需要および輸出産業との関わりを知ることのできる貴重な資料と言え、今後も継続して調査を行う必要があると筆者は考えます。今後は他館に収蔵されている関連資料も含め調査を行い、研究を進めて参ります。

（非常勤学芸員・山口（やまぐち） 希（のぞみ））

註

（1）藤田千紘「海を渡った錦絵カレンダー―川俣絹布整練株式会社明治四十三年カレンダー」『国立国会図書館月報』No.681、秋山勉編集、国立国会図書館発行、2018 年、4 頁

（2）岩切信一郎「明治の大量出版物―暦とカレンダー」『版画芸術』150 号、阿部出版、2010 年、122 ～ 125 頁と、上記（註 1）の 5 頁に指摘がある。

（3）「花模様」に関する詳細な情報は、2021 年度國學院大學大学院に同作品についての修士論文を提出した浅川綾菜氏にご指導いただいた。

（4）『開国五十年史　附録』大隈重信編、開国五十年史発行所、1908 年、329 頁

（5）『横浜成功名誉鑑〈復刻版〉』有隣堂、1980 年、147 ～ 148 頁

THE けんぱく PUNCH

学校と博物館の連携

博物館に行くと、学校行事で来ている子どもをよく見かけるな、と思うことがあります。実は昨年までに、小・中・高等学校のカリキュラムの基準となる学習指導要領が約 10 年ぶりに改訂されました。その中では、学校と博物館が連携を深めながら教育効果を高める「博学連携」の重要性がより一層強調されています。当館での学校連携はどうなっているのか、当館営業部長のパンチの守がけんぱくの学習指導員にインタビューしました。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

パンチの守（以下パ）：当館には学校の皆さんもよく来てくれておるが、やはり実物を見ると授業にも役立つのかのう。昨年あたりから、また学校団体の来館が増えてきたように感じるな。

学習指導員（以下学）：昨年は自粛の続いた一昨年に比べて、かなり多くの学校団体が来館されましたね。“百聞は一見に如かず”という言葉のとおり、実物資料には教科書や資料集など本の学習だけでは得ることができない教育効果があるのではないでしょうか。

パ：初めて博物館を訪れたのは学校行事という大人も多いしのう。学校で来てくれるのはありがたいことじゃ。とはいえ、入館できる人数は限られておるし、いくつも学校が来てしまったらどうするんじゃ？

学：一度に入館することができる人数に限りがあるので、事前予約を必ずお願いしています。その調整も学習指導員の仕事のひとつです。

パ：ほうほう。それは大変な仕事じゃな。他には学校との連携というと、どのようなことをするのかのう。

学：高校生になるとインターンシップを実施する学校も多いのですが、神奈川県が実施するインターンシップ制度の受け入れなども行っています。

パ：具体的にはどんなことをやっておるんじゃ？

学：まずは当館の紹介を兼ねて展示室・バックヤードの見学からはじまります。その後は各課の仕事を実際に体験してもらいます。例えば、収蔵資料の整理やイベントの手伝いなどです。最終日には展示解説もするんですよ。自分で選んだ資料について調べるところから始めて、最終的に皆の前で解説をするのですが、参加者には大変好評で、インターンシップ期間中で最も思い出に残る取組のひとつになっています。

パ：なるほど。受け身ではなく、まさに今流行りのアクティブラーニングじゃな。

学：さすが営業部長、よくご存じですね！　その他に先生側との学校連携ももちろんあります。例えば、県の総合教育センターと連携し、先生が研修活動をしやすい夏休みの時期などに「教員のための博物館講座」「教員の社会体験研修」を実施しています。

パ：日々の授業で教えるのは先生じゃからな。先生たちにも当館のよさを知ってもらわねばなあ。これからも学校連携に期待しておるぞ。

学：今後はより一層、多くの先生たちが来館したくなるような工夫をしていきたいと思います。そして、学校教育にももっと貢献することができるよう取り組んでいきたいですね。

（元非常勤博物館学習指導員・黒木（くろき）　俊治（としはる）／
非常勤学芸員・市野（いちの）　悦子（えつこ））

学習進度に沿ったワークシートを使って展示見学

発行：神奈川県立歴史博物館　https://ch.kanagawa-museum.jp/　twitter @kanagawa_museum
〒231-0006　横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：令和 5 年 8 月 7 日　印刷：株式会社 TAKT・JAPAN